

まいど！ざいむ局です！ ～ 起業家編 ～



関西元気企業

～誰かのために役に立ちたい～

大阪府東大阪市、約 6500 件の町工場がひしめくモノ作りの街。機械の音が街全体を包み、狭い路地に金属と油の匂いが漂う。そんな街の一角にあるひとときわ小さな工場。表には、「HOSOANAYA」(細穴屋)の看板。

中をのぞいてみると、職人のほとんどが子育て中の女性。ここは、金属に直径が髪の毛ほどの穴を空ける“細穴加工”専門の企業、株式会社 エストロラボである。

今回は、男社会ともいえるモノ作りの現場で、女性を活用し急成長を続ける、女性経営者 東山香子さんの抱く夢に迫りました。

企業情報

名称 株式会社 エストロラボ
所在地 東大阪市荒本西 4-2-25
創業 2006年 代表者 東山 香子
従業員 5名 資本金 8.8百万円
H P <http://estrolabo.com/>

●起業には、子供の頃からの夢が大きく影響したそうです。

私は、幼い頃、ガールスカウトに所属していました。その頃からなんとなくですが、無報酬のボランティアという活動に惹かれていったのです。高校生の頃になると、世の中の拝金主義という風潮が好きになれず、どんな仕事でもいいので、人の役に立てる仕事がしたいという想いを持っていました。ぼんやりですが、いつか途上国に行って、子供たちに職業訓練などの教育がしたい。それがいつしか私の夢になっていったのです。

ある日、青年海外協力隊の募集ポスターが私の目に飛び込んできました。募集要項を見ると、「陶芸の実務経験3年以上」とあり、善は急げと、信楽焼の窯元に就職し、実務経験を積んで協力隊に応募しました。入隊の2次試験にも合格し、やっと自分の夢の端を手繰り寄せたと思った瞬間、すりとその夢が私の手から滑り落ちていったのです。訓練期間中に体調を崩し、派遣中止の決定。「なぜ、あと一歩のところどころなるのか」、自分の運命を呪いました。諦めて別の道を目指した方が良いのか、神様はそうおっしゃっているのではないかと、何度も何度も自分に問いかけました。

しかし、どうしても協力隊への入隊を諦めることができません。当面は体調を整えながら、発展途上国の子供たちに伝える技術を身につけようと決めました。「こんなことぐらいで自分の夢を諦めるわけにはいかない」、この想いが私を支えていました。

その後、手に職をつけようと職場を転々とする中で、知人から、東大阪の金属加工会社を紹介してもらい、工員として雇ってもらうことになりました。「どうして製造業に」とよく聞かれるので



東山 香子 社長

すが、父が鉄工所を経営していたこともあって、抵抗感は全くありませんでした。

その会社では、微細な穴を放電によって空ける細穴加工の部門に配属されました。熟練工の方に聞けば、細穴加工の技術はそれほど複雑ではなく、未経験の私でもできるのではないかとということで配属されたようです。その頃の私は、「いつか途上国の人の役に立つため、青年海外協力隊に入隊する」と、機会があれば自分の夢を誇らしげに語っていました。あの日もそうでした。いつものとおり自分の夢を誇らしげに語っていた時です。知人から「まず、足下の日本の苦しい立場にある人たちの役に立ってみてはどうか」との言葉が投げかけられたのです。世界を見つめてきた私にとって、衝撃的な一言でした。言い換えれば、「足下の問題も解決できないのに、世界の問題が解決できるわけがない」、何か後ろから頭を殴られたような衝撃を受けたのを覚えています。

足下の問題。その時、頭に浮かんだのが、当時、同世代の女性から「女性は働きたいと思っても、子供の送り迎えの関係で残業はできないし、そんな女性を雇ってくれるところも少ない」という悩みの声でした。「この問題をどうにかしよう」、それには、自分で会社をつくり、子育て中の女性たちを雇用していけば良いのではないかと。そんな想いが芽生えたのです。

次の瞬間、私は、勤務先の社長に独立を願い出ていました。会社に勤めてから僅か11か月しか経っていません。無謀な申出に怒られることも覚悟していたのですが、社長からは「女性だけで金属加工会社を立ち上げたら話題になり、業界にとってもプラスになるのではないかと」了承をいただき、資本金の一部も負担していただけることになったのです。こうして、株式会社エストロラボが誕生したのです。

ちなみに、「エストロラボ」という社名の由来は、女性の町工場であるということ強調するために、女性ホルモンの一つである『「エス」トロゲン』にイタリア語で芸術家を意味する『マエストロ』と英語で制作室を意味する『「ラボ」ラトリー』を組み合わせています。

●起業後どのような苦難が待ち受けていましたか？

起業当初はやはり技術面で苦勞しました。今であれば2時間でできるような加工を丸1日かけて作業していましたし、仕事が舞い込んだとしても、見積もりが作れずに注文を流してしまうこともありました。今振り返ると、あの程度の技術、知識でよく起業したものだと思います。

前職の社長の紹介で仕事を回していただくことにはなりましたが、そればかりを頼りにするわけにもいかないので、起業

後1年間とはとにかく営業活動に注力しました。周辺の工場を一軒一軒、自転車で回りましたが、来る日も来る日も、門前払い

の連続。たまに話を聞いてもらえても、女性だけの町工場ということで、全く信頼してもらえませんでした。資金繰りも相当苦しくなり、知り合いの銀行員などにも連絡をとり、必死に頼んで融資を受けたこともありましたが、それでも一向に資金繰りが改善することはなく、私自身1年間無給で働き続けました。

前職の社長や知人から援助を受けた資本金も早々に底をつく始末。恰好よく女性の雇用を創出すると起業しても、その会社が存続できなければ全く意味がありません。

細穴加工用設備にかかる費用はそれほど高くないので、取引先が内製化することも十分に考えられます。数少ない注文でしたが、ミスが生じないように細心の注意を払い、実績を積み重ねていきました。



勤務する女性従業員

さらに、「注文どおりに加工できなければ、代金はいただきません」と言って、成功報酬を条件に仕事をさせてもらう戦略にも出ました。

こうした地道な営業活動が奏功し、徐々に口コミで仕事が舞い込むようにはなったのですが、それでも十分な受注を確保できませんでした。「自分たちのことをもっと知ってもらう必要がある」、そういった思いで、ホームページを立ち上げることにしました。女性であるがゆえに信用を得るのに苦労したときは、自分が女性であることを呪ったりもしましたが、今度はそれを逆手に取り、女性であることをPRしたのです。

すると、当社のホームページを見た複数のメディアが、女性だけの珍しい金属加工会社として取り上げてくれ、取引先が全国に拡大していったのです。

●今後のビジョンについてお聞かせください。

今は、女性が働き続けられる職場づくりが何よりも大切と考えています。従業員は子育て世代が多いため、実際の就業時間や休暇については柔軟に対応しています。例えば、子供が急に熱を出したら、すぐに帰宅してもらい、未着手の仕事は残った人間で分担するようにしています。ただし、今の従業員数ではお互いをカバーするときに多少の無理が生じるため、将来的には30人雇いたいと考えています。30人雇うことができれば、世代に幅ができるので、子育て世代が1、2年抜けることになってもカバーできるからです。今後は、社内に託児所を設けるなど、今まで以上に女性が働きやすい環境を整えていきたいと考えています。



**オランダから 250 個の注文が急遽
舞い込んだ「ネジロボ」**

確かに取引先は全国に拡大しましたが、まだまだ楽観できるような状況ではありません。細穴加工というのは、取引先からコンスタントに注文がないので、すそ野を広げておく必要があるのです。

最近新しいことにも挑戦しています。例えば、「ネジロボ」という細穴加工技術を用いた小さなストラップを考案しました。展示会用に作成したのですが、SNSで画像を紹介したところオランダから250個の注文を受けたのです。元々は、販売を予定していなかったのですが、当社の細穴加工技術が存分に発揮されているので、良い広告材料になると思っています。

他にも、業態にこだわることなく、今いるメンバーの能力を最大限に生かせる事業にもチャレンジしています。それが生産管理システムの販売です。子育てしながら働ける環境を求めていたシステムエンジニアの女性を雇うことになり、彼女に自社用にシステムの開発を命じたところ、これがあまりに便利だったので、他の町工場にも販売したのです。購入していただいたお客様からは非常に好評を得ています。

さらに、当社が広く認知されるに連れ、様々な注文を受けるようになりましたが、中には当社で対応できない注文も舞い込みます。こうした注文を簡単に断るのではなく、「〇〇さんところなら、対応できるかも」と一旦注文を受け、当社から関係先に委託することも行っています。お客様にとっても、当社に依頼すれば、「何とかなるのでは」という効果が生まれています。

私は、当社を女性に限らず、一人でも多くの人たちの役に立てるような企業にしていきたいと思っています。

●社長の夢だった青年海外協力隊への入隊は、今後どうされるのですか。

青年海外協力隊ですか？ 残念ながら、目まぐるしい日々の中で参加する機会を逃してしまいま

した。でも、私自身の最終目標は、全く変わっていません。必ず、途上国の人の役に立ちたいと思っています。

将来的には、この会社を従業員に継承し、途上国で教育関係のNPOを立ち上げようと思っています。

<取材後記>

「夢が1つ叶いました。本当に嬉しかったです。12歳の時、いつかサッカー選手としてセリエAで背番号10をつけ、プレーしたいと作文に書きました」、サッカー日本代表の本田圭佑がイタリアの名門チーム「ACミラン」への入団会見で語った言葉である。小学生の時に描いた彼の夢が1つ叶った瞬間である。

東山社長は、幼い頃から「困っている人を助けたい」、「途上国の人の役に立ちたい」という夢を思い続けてきた。途中、様々な挫折と苦難があったが、諦めずに着実に前進し、時には僅か11か月の経験であったにも関わらず、「独立をさせて欲しい」とオフサイド気味に飛び出し、果敢にゴールを目指す。全ては夢の実現のために。

当面の目標は、「女性が働き続けられる職場づくり」。でも、最終目標は、「途上国の人の役に立つこと」と語る、東山社長。今も全くぶれることのない夢。

それは、子供の頃の「リトル東山」に確認する必要もない。

彼女の切り開く細い穴の先には、夢の大きなゴールが待っている。

掲載している情報は、平成25年11月時点のものです。